

2002年4月23日第三種郵便物認可（毎月3回5の日発行）
2005年5月8日発行 SSKW 増刊 通巻第441号

SSKW

海から海へ

No.7 2005.5.30 【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0024 東京都調布市布田1-43-3

オリエンテーション108 うつわ和季内

TEL & FAX 0424-41-2958

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



ヨット 333x242(mm) © Mizuki Tanaka 1986

海から海へ は、瑞木さんの60余点の絵がいつでも誰でも見られるように、
みずき美術館を設立する準備をしています。ご協力をお願いします。

事業の報告と計画

新年度を迎えました。2003年10月発足した本法人は、この間、障がいをもつ人の社会的価値の転換を図り、当事者とコミュニティの発達に寄与することを目的として、さまざまな活動をしてまいりました。以下、昨年度事業報告と今期計画を述べます。（この内容は本年5月22日開催の通常総会で承認されました。）

第1に、障がいをもつ人を中心とした美術館の前段階として、常時10数点の作品を展示できるアトリエを調布市に開設し、昨年9月に現在の場所（調布市布田）に移転しました。小スペースですが、年間5回展示作品を交換し、年間計60数点の作品が鑑賞できるようになりました。また、コミュニティケア活動支援センターの助成を得、「出前ミュージアム」を開始しました。現在、市内6箇所に、障がいをもつ油絵作家田中瑞木の作品が展示されています。絵は毎月交換され、生活の場で感動が共有されているとともに、美術館建設へ向けた協働の輪が広がっています。今期は10箇所程度まで増やす予定です。また、調布市市民プラザ「あくろす」市民活動支援センターにて展覧会を開催します。各地のさまざまな活動に連携し、展覧会を開催することにより、アートの力でつながりを深めます。障がいをもつ油絵作家の画集を制作・出版する準備を進めます。

第2に、障がいをもつ人を中心とした心理と社会福祉実践活動を行う場として「こころとふくしの研究所」を開設し、その場を拠点として、障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究を行いました。今期も研究を継続し、結果を公表し実践に役立て、成果を基に立法行政への提言を行います。

第3に、障がいの有無によらずともに発達することを目的とし、ジャム作り、フリートーク、ピザパーティなどを通し地域の人々との交流を行いました。今期も活動を継続します。

第4に、「こころとふくしの研究所」において、臨床心理学研究生を対象とした勉強会を開催するとともに、臨床心理研修を行い、人材育成に寄与しました。また、地域の人々が本法人の活動を支援するために企画実行したコンサート＜海から海へ＞に協力しました。さらに、「障害者から学ぶ会」との共催で、神戸市において座談会「命を語ろう」を開催しました。実施にあたり、兵庫県・神戸市から「障害者から学ぶ会」に対し阪神・淡路大震災10周年記念事業として助成を、また、コミュニティ活動支援センターから本法人に対しイベント助成を得ました。今期の活動としては、まず、開かれたミュージアムを企画実践している三木美裕氏をお招きし、「美術館 次の時代の始まり」についてお話を伺います。また、平成17年度調布市社会教育関係団体補助金交付事業として、電気通信大学において、シンポジウム「愛のあるコミュニティへ向けて」を開

催します。さらに、地域の人々が主催するコンサートの企画に協力し、対象者を広げた勉強会を継続し、コミュニティにおける社会教育に寄与します。

第5に、「こころとふくしの研究所」に「こころとふくしの相談室」を併設し、障がいをもつ当事者とその関係者を対象とし、個別相談、教育支援、生活支援を行いました。今期も継続して実施します。

第6に、2004年6月、10月、2005年1月、2月の計4回会報を発行しました。活動と成果を随時インターネットホームページで公表し、コミュニティからのアクセスを容易にしました。今期も年4回、会報を発行します。

第7に、上記事業を推進するため、各種助成金へ応募した結果、上述の助成を得ました。今期も積極的に応募を行います。

以上のように、大きな成果を挙げることができました。皆様のご支援ご協力に、厚く感謝申し上げます。今期も変わらぬご支援ご協力をお願いいたします。

2005年5月22日

特定非営利活動法人 海から海へ
理事長 阿部公輝

平成16年度会計報告（単位：円）

| | |
|------------------------------------|-----------|
| I 経常収入の部 | |
| 1. 会費収入 | 303,000 |
| 2. 寄付金収入 | 4,109,230 |
| 3. 受取利息 | 6 |
| 経常収入合計 | 4,412,236 |
| II 経常支出の部 | |
| 1. 事業費 | |
| (1)障がいをもつ人を中心とした芸術活動の支援と作品の公開展示 | 306,257 |
| (2)障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究と実践 | 568,147 |
| (3)障がいをもつ人を中心とした交流の促進 | 178,066 |
| (4)芸術、教育、心理、福祉などに関する社会教育 | 30,145 |
| (5)障がいをもつ人とその関係者のための個別相談、教育支援、生活支援 | 2,000 |
| (6)活動に関する広報および成果の公表 | 318,828 |
| (7)(1)～(6)の事業活動のための募金 | 3,759 |
| 2. 管理費 | 550,835 |
| 経常支出合計 | 1,958,037 |
| 経常収支 | 2,454,199 |
| 前期繰越 | 562,050 |
| 次期繰越 | 1,892,149 |

シンポジウム

愛のあるコミュニティへ向けて

まなび・障がい・アート・こころ・いのちからの発信
2005年6月19日(日)午後2時~5時
電気通信大学80周年記念館3階会議場

この社会では、経済的な価値や効率が重視され、人々は比較と競争の関係の中で孤立して生きているといっても過言ではありません。いじめやひきこもり、こども・高齢者・障がい者に対する虐待、中年の高自殺率、さらには弱いものがより弱いものの命を奪う事件など、目を覆いたくなるできごとが起きています。

私たちは、人はひとり一人がかけがえのない存在であり、その前提のもとに、ともに喜び悲しむ関係によって作られた人と人とのネットワーク(愛のあるコミュニティ)の中に真の価値があると考えます。本シンポジウムはこの考えに立ち、さまざまな視点から問題提起と分析を行い、愛のあるコミュニティの構築へ向かう力を生成することを目的として開催されます。

まず、『まなび』による他への関心と共感を媒介とし、『アート』のもつ根源的な力、『障がい』やこどものもつ無垢な人間の力、『こころ』という不定形であるが確かな個の存在、そして、『いのち』の意味と世界との関係について、それぞれの視点からパネリストに提起していただきます。次に、それらの視点の関連付け・相互性の連鎖により、あらたな意味を探りあてます。さらに、連携のダイナミズムから人々のネットワークを作り出し、参加者をはじめ市民の皆様が、ともに学び育ち、広く深く活動を展開していく力としたいと思います。多くの皆様のご来場をお待ちします。

プログラム概要

I. こころのつながりを作るワークショップ

山西優二(早稲田大学文学部教授)

II. パネルトーク

黒岩秩子(大地塾主宰・元参議院議員・保育士)

本江邦夫(府中市美術館館長・多摩美術大学教授)

佐藤 誠(元日本大学心理学科教授・多摩いのちの電話運営委員 調布市在住)

酒井一真(浄土真宗本願寺派西照寺前任職・武蔵野大学評議員 調布市在住)

山西優二

コーディネータ:阿部愛子(NPO法人「海から海へ」こころとふくしの研究所所長 調布市在住)

・全体での意見交換

みーちゃんの展覧会 Part II

2005年7月8日(金) ~ 22日(金)

午前9時~午後10時

調布市市民プラザ「あくろす」市民活動支援センター

ここしばらく、障がいをもつ画家とどなたかボランティアさんとがルームシェアで暮らす可能性を模索しています。そのことで、開設まもない市民活動支援センターにお伺いする機会がありました。それが展覧会開催のきっかけです。

センターの広々とした空間を見て、展覧会ができるのではないかと考えた私たちは、センターのTさんにその話をしました。Tさんも、オープニング記念にぜひお願いしたい、とのことで話はとんとん拍子に進み、海から海へと市民活動センターとの共催ということで展覧会実現の運びとなりました。

7年前の調布市文化会館たづくりりでの企画「みーちゃんの展覧会」では、5週間で6,000人もの皆さんが作品を見に来られました。今回は、「ねこの原っぱ」や「秋のサファリパーク」といった代表作を含み、1998年以降の以下の作品を主に展示します。(サイズはmm×mm)

- ・希望の人 People toward Hope 910×727 1999
- ・春 Spring 910×727 2000
- ・温泉 A Hot Spring 910×727 2000
- ・花火 Fireworks 1100×1100 2001
- ・線香花火 Senko-Hanabis 430×430 2001
- ・馬の家族 A Family of Horses 727×910 2002
- ・ともだち We Are Friends 727×910 2003
- ・ふたりの海水浴 Sea Bathing of Two 910×727 2003
- ・フロイトの家の前で In Front of Dr. Freud's House 727×910 2004

市民が集う場所での記念の展覧会となります。会期中土曜日には画家本人も会場にあります。皆様どうぞお越しください。



(本年2月、京王線国領駅北口に開設された「調布市市民プラザあくろす」は、市民活動、男女共同参画活動、産業振興などの支援を目的とする3つのセンターで構成されています。そのひとつ市民活動支援センターは、市民活動を支援し、協働の輪を広げるための施設です。)

コミュニティケア・イベント助成プロジェクト

座談会「命を語ろう」

～神戸・新潟中越・東京を結ぶ市民の集い～

2005年3月5日神戸酒心館ホールで開催されました

共催：障害者から学ぶ会(代表 本法人理事 本間康浩)／海から海へ

コミュニティケア活動支援センター事務局長

佐藤修

障がいや自然災害は、命の不思議さと自然の大きさを伝え、明るさや励ましを通して、生きていることのかけがえのなさを気づかせてくれる。障がいを持つ人からの学び、自然災害からの学び、そこに共通するのは「命への輝き」だ。今回のイベントは、さまざまな体験からいのちを学ぶ集まりのプロローグとして企画された。

開催地は大震災10年目の神戸。そして、神戸、中越の震災の渦中で活躍した人たちに、地域のつながりの重要性を体験的に話してもらおうとともに、東京や神戸で障がいをもつ人から教えを受け取り、共に生きようとする人たちの体験談も語ってもらった。最後は参加者みんなで、それぞれの地域でのコミュニティ作りの現実や展望を話し合った。

参加者は40人だったが、とても深い話し合いが行われ、そこに流れる人間の営みから生まれる力や愛と励ましを強く感じることができた。そして、参加者を核にして、いのちを学ぶイベントを継続的に企画開催するネットワークが生まれた。新しい物語の、まさにプロローグとなったイベントだった。

(佐藤修編「コミュニティケア活動支援プログラム 2004年度活動報告書」2005.5.20から転載)

『生命・きずなの日』記念祭

2005年5月14日開催されました

主催：記念祭実行委員会／日本ドナー家族クラブ

阿部公輝

本法人も助成をいただいている「コミュニティケア活動支援センター」でお仲間となりました間澤御夫妻のご長女朝子さんは97年アメリカ留学中に事故で亡くなられ、ドナーとなられました。ご夫妻は同じような経験をもつ日本のドナーの家族の会を組織され、生命の尊さ、生命の大切さを見つめあう『生命・きずなの日』記念祭という会を毎年催されています。ご夫妻のご希望により、本年は田中瑞木の作品展が会場で開かれ、14点が展示されました。

記念祭では、パネリストの一人に本法人副理事長の阿部愛子も招かれ、自らの体験を語りました。障がいをもつ娘を育てる

中で、一度は鬱になり死を考えたこと、しかし、絵を通して懸命にいのちを表現する娘に気づき、そのことに励まされ今自分がある、今は、体験と学びを通し、援助の仕事に携わっていると述べ、会場から暖かい拍手が湧き上がりました。



三木美裕さんをお迎えして

美術館～次の時代の始まり

2005年5月22日開催されました

電気通信大学AVホール

(株)メディアリンクス・ジャパン

穂積宇理

座談会形式で行いたいという三木さんの希望で、リラックスした雰囲気が進められました。

以前勤務されていたシアトル美術館や、ボストンチルドレンミュージアムの例を紹介され、アメリカでは女性が博物館経営の中心を担っていることや、70年代から進められてきた体験型展示が非常に一般的なものであることを説明されました。また、お客様、スタッフ、ボランティアの3つがどのようにかみ合っているか、が今後の博物館経営で重要な要素であることを説明されました。アメリカではほとんど全ての美術館が「個人のコレクション」から発展した私立の美術館であるため、ヨーロッパや日本の、国立博物館を中心とした博物館よりも「いかに見せるか」という要素が大きかったのでしょうか。

また、100年ぶりに作られる国立博物館である、九州国立博物館では日本と外国の交流の歴史を主題として収集・展示が行われており、日本国内の前例主義と戦いながら今年10月16日の開館に向けて魅力的な展示ができるよう努力されていることを説明してくださいました。

今後の博物館の発展の方向については、まずデジタル化がさらに進むことをあげられました。「音声ガイド」のサービスは、さらに細分化して便利なものになってゆくだらうとのこと。たとえば子供には子供向けのガイドがあるのは、欧米では当然のことだそうです。

また「博物館教育」が重視されてゆくそうです。日本ではかつて博物館教育を軽視した結果、子供たちの博物館離れが進んでしまったことを教訓にしなければならないということです。アメリカでは「出前美術館」というものがあり、アムトラックを使って美術品を地方の人々が見ることができるように巡回展を行うのだそうです。

アメリカでは、美術館の資金面の経営については、信託資金を大量に持っている場合が多く、銀行に預ける利子収入だけでも運営できるということでした。もちろん、その上で人がくるような魅力的な展示を行わなければなりません。助成金に頼る日本のあり方とは決定的に異なるのだと思います。日本でも指定管理制度（私企業に企画と運営を委託する制度）が進められています。実は私はその制度に少しだけかかわることがあったのですが、実際には非常に内部的な制約が多く、普及してゆくには困難があるだろうと感じました。

キーワードとしてあげられたのは、

EDUCATION + ENTERTAINMENT = EDUTAINMENT

でした。そして、それを行うことができるのが、

EDUCATION + CURATOR = EDUCATOR

という存在です。お客様の声を効果的に取り入れ、双方向的にコミュニケーションすることのできる学芸員が求められているのです。もちろん本来の業務である「研究」をおろそかにしてよいということではないのでしょう。原美術館では PUBLIC PROGRAM CURATOR という職種があるのだそうです。また、英語の LEARNING & INTERPRETATION は日本では教育普及と訳されることが多いのですが、もっとうまい訳語があれば使いたいとのことでした。INTERPRETATION は説明、通訳、演奏などという意味がある言葉ですね。興味のある方は三木美裕著「キュレレーターからの手紙～アメリカ・ミュージアム事情～」を。

シラキュースの4人の親

— 積極的に、思慮深く、誇りをもって —
シラキュースの報告（4）

こころとふくしの研究所所長・プレみずき学芸員

阿部愛子

1. はじめに

前の年、フランスでお会いできた親の方々と私は障がいをもつ子どもの親としての親和的な時間をもつことができました。シラ

キュースを訪れることが決まったとき、障がいをもつ子どもの親御さんにお会いしたいと強く思った。国が違っても親としての共通の思いがあるということを知り、アメリカではどうなのだろうかと思いを巡らせた。ウルヘンスパーガーが教鞭をとっていたシラキュースの地という関心も高かった。

アメリカでは施設が解体され、グループホームが多いといわれた。事前にグループホームの見学を希望していたが、シラキュースで私たちは見ることはなかった。グループホームはどこにあるのだろうか。きっとどこかにあったのだろうけれど、センター・オン・ヒューマン・ポリシーのボニーさんとパムさんがセットしてくださった予定にはなかった。

家族と暮らしているRさんの母親、一人で暮らすLさん親子、そして支援者と二人暮らしのSさんと両親 4人の親にシラキュースで出会った。

2. Rさんの母親（50代）

Rさんは24歳、障害名はレットシンドローム、障がい判明したのは2歳のときという。障がいがあったときの気持ちは悲しいし、恐いし、びっくりしたし、残念に思ったとお母さんは語る。障がいの子とその親は相互に影響を及ぼし、不安定になり、感情のコントロールがうまくいかない。しかし、時間とともに周囲の支援を受けながら、親は望まない子どもの出現に戸惑いながらも、行き戻りしながら障がいの子どもを認め、受け入れ、育てることに熱心になっていくといわれている。

お母さんがRさんを育てるにあたり、どのような援助を受け取ったのか。「小学校へ入る前の療育センターはずばらしかった。怒りが消え、一緒にやっていけなくてとは自分自身が変わっていった。贈り物をもらった。」続けて、「親は子どもを愛して、ベストを求めてやっていくしかない。私はがんばってやってきた。彼女については他の人がやっているように『普通に』を求めてきただけだけど、それは一つの目標になった。」

Rさんがシラキュース大学で音楽の授業に出ていることが実践結果であり、先駆的な例となっている。「しかし、完璧を求めないことが大事。たとえば、家に15人の娘の支援者がRのミーティングに集まる。どのような支援を、どのような時間帯で、だれがするのかを決めていくのだけれど、私はみなさんのために料理を作るだけかしらない。」

この話は障がいの子どもの生活全般を親が決定していたことから、親自身が解放されることを意味している。自分の娘を第三者に委ね、そこでは口出しをしない。一緒に暮らしているけれど本人の生活を決定するのは親ではない。親の重荷は軽くする。そしていろいろな人の声を聞く。きてくれませんか聞いてみる。支援をする人は1度関わるとまた、支援をしたくなる。むしろ、やりたい気にさせるのかなど。また、親だけではなく、姉妹のプレッシャーもなくなる。親がいなくなったらと、

姉妹が気にしていたけれど、多くの方とかかわってもらっている生活を見て、姉妹も気持ちの重荷が軽くなってきたようだという。親が作る枠組みではなく、その子どもに則した生き方ができる。また、支援者は親が子どもに聞けないことも聞くことができる。たとえば、親のエゴが優先して、住むところを本人に聞かず勝手に決めてしまうことはないなど。日本では、いまでも親が子どもをコントロールし、本人の考えも確認せずに、暮らしを続けていた地域から遠く離れた施設入所を決めている例が跡を絶たない。親の都合が優先することについてなにも疑問を感じていない親はまだまだ大勢いるのが現実である。

「Rは笑顔がすてき。受け入れる気持ち、つまり包容力がある。子どもが大変だったので、生まれたときはガタガタ崩れた。今は家族とともに幸せで、健康でいる。贈り物ももらったと思う。求めるのではなく、大きさを教えてもらった。子どもの存在自体が価値を与えるよね。」お母さんはファシリテーター（人間中心のグループリーダー）の一人で、周りの人たちに教育をしてきた。コミュニケーションのエンパワーメント（自分の中に力を蓄え、積極的な自己を作り出すことによって問題を解決しようとする方法）を今も行っている。

3. Lさんの母（80代）

Lさんはひとり暮らしである。リビングと個室が3部屋からなる一軒家に住んでいる。冷蔵庫や食品庫には多くの食品が備蓄され、お茶も食事も一人で自由に摂っている。1室はLさんの手仕事部屋になっており、布、針、糸、ミシンなどが置かれ、パッチワークのベッドカバーを作ったりしている。隣の方はなにか手伝うことはないかと毎日聞きにきてくれるという。それ以外にもコミュニティの中に多くの支援があるそうだ。

お連れ合いがなくなった後、お母さんも別のところでひとりで暮らしている。お会いして5分も経たないうちから、「ひとり暮らしは不安に思うこともあったけれど、娘がそれを望むならば親はそうできるように見守る。それが親の仕事です」というお母さんの考えが素直に伝わってくる。施設からグループホーム、ひとり暮らしというふうに住まいは変遷しているけれど、いつからかは親が干渉しない、親は干渉できない。子どもの人権を当たり前のように認めているだけなのだろう。障がいがあるからという理由で人権を無視することは親であっても許されない。

Lさんは軽度の知的な遅れがあるということだが、会報No.4でお知らせしたニューヨーク州立シラキュース発達サービスオフィスの当事者ミーティングのメンバーである。そこでは自立の意味を体感しているピープルファーストの仲間も多い。コミュニティで暮らし、ネットワークを作り、自己肯定感をもってしっかり生きていく姿が自然であった。

お母さんは話す。私にだけ頼るような大人にしたいと考

えてきた。そのプロセスでいろいろ学んできた。さほど不安はなかった。いろいろなサービスができてきた。このコミュニティでサービスのネットワークを作っている。

実はLさんのお兄さんも障がいをもっている。52歳で遠く離れたケアリングホームで暮らしている。Lさんはこのお兄さんのことをとても気にしているそうで、近くのグループホームに越してきたら、もっと会えていいなというそうだ。

Lさんのお母さんは80歳、健康のため食事は少しにしているとか。3人の子どもを育て終えたという余裕があり、元気そうであった。お母さんのふるまいから、人生の節目節目ではその都度、思慮深く生きてこられたと感じるところが多々あった。

4. Sさんの両親（60代）

ダウンシンドロームのSさんをご両親と同居人の女性とで私たちを待っていてくださった。彼女は10年前6人のグループホームで暮らしていたが、1年半前からここにいる。広いリビングルームと3ベッドルームがある5階建てマンションの眺めの良い部屋。ゆったりとしたソファやコーディネートのできるカーテン、機能的なキッチンのはつらえが快適な生活を彷彿とさせる。

親たちがエージェンシーを立ち上げ、そのエージェンシーがこの家を運営している。会報No.6でお伝えしたパットさんのエージェンシーOCLのスタッフがSさんと暮らしをシェアしている。家賃はSさんが負担する代わりに、同居人はSさんを支援するという契約になっている。OCLにとってここは3つ目のアパートで、他にも同様な暮らしをしている方たちがいるという。ニューヨーク州のポリシーとして大人数の暮らしは認めない。施設はもちろんグループホームも作らないという考えが下地にあつてのことだ。

あるときグループホームで娘のジュエリー（宝石）がなくなったことがあった。娘はとても心配した。グループホームのスタッフはただ「ない、ない」というだけだった。スタッフは私を神経質な親と思った。結局第3者であるポニー（センター・オン・ヒューマン・ポリシー）の介入により支援者が犯人と判明し、解決できた。子どもの安全が保証されること、だまされたり利用されたりしないようにしてきましたとお母さんはいう。お父さんもそこで強く頷く。協働して、子どもにかかわってこられたことが伝わってくる。お父さんが弁護士という職業柄、被害者にならない意識がより強く働いているのかもしれない。しかし、弱い立場の人たちが被害に会う状況はどこにでも起こりうる。「シラキュースはセンター・オン・ヒューマン・ポリシーやシラキュース大学があるから家族は孤立していない。いまは安心です。娘が幸せだから私も幸せです。」

Sさんはみんなのためのコミュニティ（地域）に金曜と土曜に帰っていく。そこでの予定やつながりを大事にしている。お

母さんは日曜から木曜まで離れた分だけ、親子の触れ合いを楽しみにしているという。Sさんはレクレーションを楽しみ、州からの支援費で自立生活ができている。旅行が好きなので、ツアーに参加するときなどは親が金銭的な協力をする。『普通の』暮らしをしていけるようになってきたつもりと話す姿が印象的である。

「日本へきてください」というと「日本にはどのような食べ物があるかしら」と聞かれた。Sさんは食べることも楽しみのひとつになっている。おいしいものがたくさん、すし、すき焼き、などいろいろありますよという、目がきらきら輝いた。

障がいの子どもの育てたことから自分自身に変化はありますかと聞いたところ、自分にも娘にも誇りをもっている。想像できない喜びを子どもがもってきてくれたと答えられた。いままでの子育てを思い出されて、感極まったのだろうか、涙が頬を伝わっていた。

「人と出会うことがとても大事だったと思う。いつもあきらめず言い続けること、ミーティング（会合）に顔を出し、リソース（社会資源）を使い、ガッツ（勇気）をもつこと。私はラッキー（幸運）だった」と語るお母さん。いつも確かめながら、生きてきた親の道のりを思った。その道を歩きつづけた自信が感じられた。

5. まとめ

ここに3家族を紹介した。こころのうちを正直に話していただき、とても感謝している。3家族とも子どもの生活について明確な考えをもち、行動をおこしていた。

- (1) 障がいの子どもの普通の暮らしをしてほしいと望んでいること
 - (2) 障がいの子どもの自身が決定することを尊重していること
 - (3) コミュニティの中で親が役割を果たしていること
- 以上がこのインタビューの重要なポイントだと思う。

障がいの子どもの生まれたことは親にとっては衝撃的なことである。しかし、人との出会いによって、人生を幸運と意味付けることができる。はじめはヨチヨチ歩きの障がいをもつ子どもの親でも、子どもとともに発達していく。その発達の醍醐味を味わう人々がもっと多く現れ、特別のことではなくむしろ自然なこととして存在し、そこから学びを得るとき、本当の人間性社会が生まれるのではないだろうか。

RさんもLさんもSさんも孤立していない。それは親の力によるところが大きいと思う。親はどのように生きていくかを考え行動していく。どのような境界があるろうと、だれにとっても生きる意味は同じと、考え始めれば開けていくと思う。そして、親は親自身の生を肯定して生きていくことが大事と思う。

平成16年度コミュニティ活動支援助成事業 出前ミュージアム～芸術と障がいを触媒とした 「愛のコミュニティ」の構築に向けて

コミュニティケア活動支援センター事務局長
佐藤修

障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在を社会が認識し、人々がそれらを宝物として共有することができれば、もっと気持ちのよい、愛に満ちた社会が実現する。これが海から海への活動の理念である。今回取り組んだのは、優れた芸術作品、その作品を生む画家、および、その画家がもつ障がいと暮らしを、コミュニティに愛をもたらす触媒にしていくことを目指した出前ミュージアム活動の立ち上げだ。

今回の主役は、知的障がいをもつ画家田中瑞木さん。調布で育ち、作業所で仕事をしながら、これまで60点以上の芸術作品を生み出してきた。これまでに開催された多くの個展や受賞歴は、彼女の作品が観る人に感動を与えることを実証している。

この瑞木さんの作品を、彼女が育った調布の街の歯科医院、動物病院、寺院、商店など6か所で展示した。瑞木さんの絵が空間に温かさとしらさを与え、会話を生み出し、人と人とのつながりを深めていくとともに、併せて用意した瑞木さんの生活や環境を示すパネルやNPO「海から海へ」の活動を示す会報などで、障がいとは何なのかを改めて考え、いのちのすばらしさに気づいてもらおう、それが出前ミュージアムを企画した阿部さんたちの思いだった。

作品に触れた人たちから、たくさんの感動が寄せられた。展示作業の協力の申し出もあつたし、活動への寄付も寄せられた。愛のあるコミュニティの構築に向けての動きが始まったのである。

美術館という限られた空間から地域という広がりのある場に設置することで、より能動的で豊かな交流を生み出す。そのふれあいこそが大切だと考えていた阿部さんたちの思いは、まさに成功したのである。展示したいといってくる商店や医院も増えてきた。2005年4月にオープンした調布市市民活動支援センター（あくろす）からも展示を依頼されている。出前ミュージアムは、着実に広がりだしている。

出前ミュージアムは順調にスタートした。次の課題は、出前の拠点となる「みずき美術館」の建設だと阿部さんたちは目を輝かせている。

（佐藤修編「コミュニティケア活動支援プログラム 2004年度活動報告書」2005.5.20から転載）

出前ミュージアム

瑞木作品を街の中のウィンドーや壁面で、ぜひご覧ください。出前先は以下の通りです。

うつわ和季 西照寺 澤歯科医院 竹内歯科医院
つつじヶ丘動物病院 船田歯科医院
やまぐち酒店 調布市布田 2-39-1
南蛮屋 調布市布田 2-16-2
森末歯科医院 調布市飛田給 1-23-11
千葉市立高洲第一中学校（9月からの予定です）

みずき美術館をはじめのために

—作品展示しています—

6/1~7/31 は瑞木さんのアトリエにて次の作品を展示しております。どうぞお気軽にお出かけください。

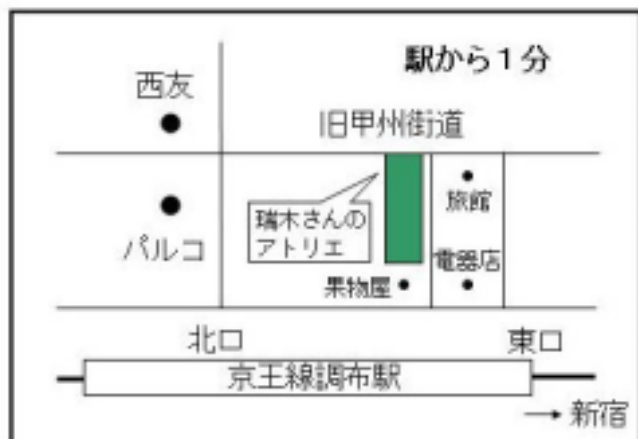
| 作品 | タイトル | サイズ(mm) |
|-----|--------|----------|
| 6. | 画室のわたし | 530×455 |
| 12. | お花畑 | 606×45 |
| 15. | ばら | 530×455 |
| 25. | テニス | 606×727 |
| 26. | サッカー | 606×727 |
| 34. | プール | 727×606 |
| 39. | ドライブ | 910×1167 |
| 44. | バーベキュー | 606×500 |
| 47. | くじらといか | 910×1167 |
| 51. | 仲間 | 1620×803 |

火・水・土 13:00 17:00 open

月・木・金・日・祝 closed

なお、8/1~8/31 は、休館とさせていただきます。

調布市布田 1-43-3 オリエンタマンション 601 Tel 0424-41-2958



ばら 530x455 © Mizuki Tanaka 1988

編集後記

夏みかんが今年もたくさん手に入り、冬から春にかけてマーマレードを作った。単純な家事は人を創造的にさせるといったのはアン・リンドバーグ。だからでもないが、そのほかにはアイロンかけが好きである。一心にしわをのぼしていると頭の中が空っぽになり、あっと思う瞬間が多くあるような気がする。

毎週顔をあわせていた仲間のTさん。二人で2年間子どものグループホームの資金作りのためにジャムを煮た。材料の夏みかんや梅を隣市から届けられた社会福祉法人のIさん。お二人とも会わなくなってから久しい。さまざまな思いが去来する。時間は贈り物。娘や息子を育てた積み重ねもまた... (愛)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

2005年5月30日 海から海へ No. 7

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田 1-43-3

オリエンタマンション 108 うつわ和季内

Tel & Fax 0424-41-2958

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200 円

無断転載禁止